

## 長崎県五島列島諸方言における\*rV の変化過程の再建

中村京介

本研究では、長崎県五島列島諸方言における\*rV の変化過程の再建を試みる。同方言の多くは、語頭以外の CV 音節で、狭母音を中心とする母音の脱落を経験している。その結果、古い層における\*rV は、次の 4 タイプの音変化を被った：①「ラ行そり舌音」への変化（以下、この体系を保持している方言を「r 方言」とよぶ。以降も括弧内も同様。）；②促音ないし内破音・口蓋化した方言（Q 方言）；③i への変化（i 方言）；④重ね母音への変化（V 方言）。以上の音変化は、上村孝二（1969）「薩摩人の観た五島列島方言の音韻」（『鹿児島大学法文学科紀要 文学科論集』5）や、平山輝男ほか（1969）『五島列島の方言』などによって報告されている。本研究の目的は、先行研究で部分的にしか考察されなかった、上記の 4 タイプの音変化についての時代的前後関係を検証し、\*rV の変化過程を復元することである。そのために、発表者は、先行研究のデータと発表者が得たデータの比較を行い、かつ、録音資料を用いて音声学的に妥当な観察に基づく比較法を行うべく、先行研究で調査済みの地点を中心とする 7 地点で調査を実施した。その結果、まず、r・Q・V 方言においては、単一方言内で別の方言タイプにおける音声的实现パターンが、条件異音や自由異音、語彙的に指定される例外的音声として混在することがわかった。このことは、\*rV の音変化が連続的で部分的なものであることを示唆する（先行研究では明言されていない考察である）。これをふまえ、諸方言の比較にあたっては、方言タイプ間での\*rV の音声的实现パターンの共有のされ方に着目した。その結果、i 方言以外の方言タイプでは\*rV>r>Q>V という変化過程が示唆された。これは、上村（1969）の r>Q という見解を支持するとともに、V 方言を Q 方言よりも新しい層として位置づける初の提案である。他方、i 方言は他の方言タイプと音声的实现パターンを共有しておらず、どの方言タイプが i 方言へと分岐したのかを特定することが難しい。そこで、本発表では、[r] と [i] の音色の類似（F2 の周波数帯域が高い）という音声学的な根拠や九州方言における「リ・ルのイへの変化」をもとに、\*rV>r>i という仮説の長短について検討していく。